



Title	日本語学校経営者のキャリア移行に伴う複合的アイデンティティの表出ーライフストーリー分析を通してー
Author(s)	岡田, 茉弓
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/96020
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 岡 田 茉 弓 ）	
論文題名	日本語学校経営者のキャリア移行に伴う複合的アイデンティティの表出 ——ライフストーリー分析を通して——
論文内容の要旨 本研究は、日本語学校の運営および事業継続に重要な役割を果たす日本語学校経営者たちを対象にし、特に日本語教師というキャリアを経験し、日本語学校経営者になった者に焦点を当てた。本研究では、キャリア移行を肩書きの変化がもたらす職務内容の変化に応じて、語りを通して自己を再定義し、それに伴いアイデンティティを構築することと捉えていることから、日本語教師の経験がある者が日本語学校経営者になること、または兼務することを日本語教師から日本語学校経営者へのキャリア移行として扱い、日本語教師という役割を保持していた者が日本語学校経営者という役割も担うようになる過程で、それぞれの職種におけるアイデンティティの構築が生じると考えた。 このような構築は、主に経営者としての業務に影響を与える可能性があるとした。そして、教師と経営者のように相反する役割を保持している者が、役割を円滑に遂行するためには、個々人が保持する他の役割と様々な調整を行い、自身のアイデンティティの整合性を図る必要があると考えた。そのような過程の中で、彼らの役割がどのように変遷し、彼ら自身の役割の移行をどのように捉え、その移行に影響を与えた社会的・文化的イデオロギーはどのようなものであったのか、それらに対して彼らはどのように自身の実態と調整したうえで、アイデンティティを構築したのかを本研究では、調査分析を行っていった。このように、日本語教師から日本語学校経営者へのキャリア移行を捉えることで、現在まで着目されてきた日本語教師というキャリアだけではなく、日本語教育を巡る様々なキャリアの存在を可視化し、これらに伴う問題を提起することが可能になると考えた。 そのうえで、本研究では、以下のようなリサーチクエストを立てた。 （1）研究協力者たちは自らの人生の軌跡を語る中で、自身の日本語学校における役割や日本語教師から日本語学校経営者へのキャリア移行の過程をどのように説明しているのか。 （2）研究協力者たちのキャリア移行に伴うアイデンティティの構築に影響を与えうる社会的・文化的イデオロギーは、日本語学校や日本語学校経営者の間でどのような言説でもって表出されたのか。 （3）研究協力者たちは日本語学校や日本語学校経営者に流布する言説の中でどのようにアイデンティティを構築したのか。 まず、一つ目のリサーチクエストについて本研究で明らかになったことを述べていく。研究協力者たちの語りから様々なアイデンティティの構築が明らかになった。そのアイデンティティは「経営者」だけでなく、「女性」、「教師だった私」、「文法開発者」、「道楽者」といった多様なアイデンティティであった。研究協力者たちは、語りの中で自己の一貫性を示したり、示さなかったりしながら、自身の人生を語り、アイデンティティの変遷を明らかにしている。また、「経営者」という中心性に関する語りにおいても、多様な意味合いが見られた。「私は経営者である」という中心性を示す語りにおいても、それに伴って日本語教師から「自身が変わった」ことを示すのか、経営者だからこそのしなければいけなかったと行動の合理性を示すのかといった多様な語りの構築が見えた。これは、研究協力者たちが自己のアイデンティティとして経営者をどのように位置づけ、それがどのように変化しているのかを示している。これにより、彼らが自身の経験からどのような視点や思考を持ち、行動を合理的に捉え、立ち位置の変化をどのように捉えているのかが理解できたのである。さらに、「複雑性」に関しても、多くの異なる形が見えてきた。これは、研究協力者たちが自身のアイデンティティを単一の役割だけでなく、複数の役割や立場として捉えていることを示している。このように彼らは、異なるアイデンティティを組み合わせ、語りを調整しながら自己のアイデンティティを構築し、アイデンティティの変容に伴う行動を説明している。以上のように、日本語教師というキャリアを経験した後、日本語学校経営者になるというキャリア移行の過程を辿った人々の「経営者」としてのアイデンティティの表出は多様であることがわかった。これにより、日本語教師の視点で語られていた画一的な教師を抑圧する経営者のイメージだけではなく、経営者自身が持つ役割意識に基づく行動の合理性や、学校設立に関わる経験、家族等の個人的価値観による位置付けの違いを考慮することで、経営者の多様性が浮かび上がった。	

次に、二つ目のリサーチクエスチョンで明らかになったことをみていく。本研究では、日本語学校において「教師」、「女性」、および「宗教」といった要素を介して、「自己犠牲的な教師文化」「家庭に専念する女性像」「禁欲であるべきとするキリスト教的な考え」という各要素に関わる理想像についての社会的・文化的イデオロギーが形成されることが明らかになった。これらのイデオロギーは、金銭的成功と無縁であることを望む傾向があり、言説への表出時には経済活動に対して否定的な意味を持つ言説となって表出し、日本語学校において流布する。その結果、経済活動に敵対的な言説が日本語学校においてドミナント・ストーリーとして共有されることとなったと推測される。このような言説は、先行研究で観察された言語教育の商品化に対する批判的傾向や、日本語学校経営者の言動に対して容認できない態度にも影響していると考えられる。そして、このような経営に対する敵対的な言説の中で、研究協力者たちは経営者として経営活動を行う立場になった。このような矛盾した状況の中で、自身の立ち位置およびそれに伴うアイデンティティについて改めて語りを構築することが求められた。そして、語りを通した「経営者」というアイデンティティ構築においては、経営学において議論となっている「高収益・高成長・男性的」という経営者に関する社会的・文化的イデオロギーが「経済的な利益を追求し、組織のために方針をある程度は強制し、教職員の生活の確保と組織の永続を担う存在」という研究協力者たちが共有している経営者像に関する言説の構築に影響を与えていた。このような経営者像に関する言説について、4名はそれぞれの思考に基づく「経営者としての私」と「ドミナント・ストーリーに見られる経営者」とを調整し、それぞれの距離感を測りながら、自身の実態と調整し語られていた。このような「ドミナント・ストーリーに見られる経営者」に対しての調整の過程こそが、本研究の研究協力者たちが経営者としてのアイデンティティの構築や葛藤の克服の重要な過程の一端だったのである。

最後に、三つ目のリサーチクエスチョンについて明らかになったことを見ていく。研究協力者たちは、日本語教師から日本語学校経営者へのキャリア移行を経験し、その過程で既存の日本語学校という内集団の規範に違反することから「逸脱者」となり、そのような位置づけの変化に対応する形で語りにおいてアイデンティティの構築が行われていたと結論付けた。具体的には、「経営者としての私」という新しいアイデンティティを構築するパターンや、日本語学校の規範をアイデンティティや行動様式を一部残した「経営者としての（または、でもある）私」というパターンが見られた。これらのキャリア移行のプロセスにおいて、経営者像や日本語学校内の経営活動に関するドミナント・ストーリーとの調整が必要とされたことを本研究では明らかにした。

以上のように、本研究は日本語教師から日本語学校経営者へキャリア移行を行うことによる矛盾した状況や葛藤の中でどのように語りの中で自己のアイデンティティを構築するのかについて明らかにしただけでなく、市場経済と教育活動の狭間で活動する彼らの語りを通して、日本語学校経営者に向けられる言説を省察し、どのような認識の枠組みの変化が必要とされているのかといった問いへの示唆を与える契機となった。具体的に言えば、日本語教育研究において、「強者」としての日本語学校経営者の姿のみを描くのではなく、ドミナント・ストーリーの中で自身の立ち位置を確立する存在であることを認識し、矛盾する言説の中で自らのアイデンティティを選択し、行動する過程で構築される「日本語学校経営者」の姿も包括的に捉えることが重要であることを示し、ひいては日本語学校関係者が立場の違いにより、現段階では捉えきれない言説に触れることがあり、そのような言説に応じて行動をとることを示唆した。本研究の意義として、3点あると考える。1点目は、経営学への新たな視座の提供である。本研究の結果から、経営学においてアントレプレナーを抑圧し、学術的に多様なアントレプレナーシップの探求を阻害していると批判されてきた「高収益・高成長・男性的な」経営者像のドミナント・ストーリーは、実際の多様な経営者像とは別に、「経営者はこうあるべき」というドミナント・ストーリーとして研究協力者4名に共有されているというのが実態であった。このような研究結果は、経営学で主に使用される文献調査や量的調査では明らかにすることが困難であった、「高収益・高成長・男性的」という社会的・文化的イデオロギーで構築された経営者像の抑圧性に、当事者がどのように対処したのかという点に対して、言語文化学的な視点であるライフストーリーをナラティブ分析するという手法を導入することで、実態がないのにも関わらず実態があるように感じられる言説としてこれらの言説が経営者の間で流通していることが明らかにした。2点目と3点目は、日本語教育学への学術的な貢献および日本語教育の実践への貢献である。本研究は、日本語学校経営者を取り巻く社会的・文化的イデオロギーについてナラティブを用いて研究することにより可視化をした。それにより、今後社会的にも議論が進むと思われる日本語教育機関経営者を、学術的に取り扱う際の知識基盤の構築に寄与したことが本研究の日本語教育学への貢献である。また、研究協力者が経営者になることによって周囲から敵対的な見方をされる状況がありつつも、その事態が周囲に十分に認識されていなかったことを示唆した。このような状況を改善するために、日本語学校内で矛盾する言説の存在を可視化し、教師や関係者が自分たちはどのような言説に接しているかを省察し、理解し、異なる意見や視点を尊重することが重要であることを提示した。これにより、日本語教育の実践において、日本語学校およびその構成員の相互理解や円滑なコミュニケーションが促進され、よりバランスのとれた教育環境が実現されることが考えられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (岡 田 茉 弓)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授 義 永 美 央 子
	副 査	教 授 秦 か お り
	副 査	教 授 小 口 一 郎

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語教師というキャリアを経験してから日本語学校経営者になった者4名を対象にライフストーリー・インタビューを実施し、彼・彼女らのキャリア移行の過程を分析している。教師と経営者のように一般的にも、周囲からも相反するとみなされる役割を保持している者がその役割を円滑に遂行するためには、個々人が保持する他の役割と様々な折衷を行い、内的な葛藤を乗り越え、自身のアイデンティティの整合性を図る必要があると考えられる。本論文は、矛盾や葛藤を孕むこれらの過程をナラティブ分析の手法を用いて検討し、日本語教育を巡る様々なキャリアのあり方を可視化することを目指している。

本論文は全9章で構成されている。筆者の問題意識と基本的な概念の定義を紹介した第1章に続き、第2章ではキャリア研究や日本語学校およびその経営者に関する先行研究を概観し、日本語教師経験者が日本語学校の経営を担う際には、1) 日本語学校が関係する社会状況の変化による経営的プレッシャーへの対応の難しさ、2) 教師としてのアイデンティティによる規範意識が経営者としての行動に影響を与え、経営者としての役割を完遂できない可能性、3) 組織構成員からの経営者の判断や行動に対する不信感や、言語学習の商品化に対する反発といった、経営活動に対するネガティブな評価による軋轢などの困難が予想されることを示した。第3章では、理論的枠組みとして創業者の役割アイデンティティとアントレプレナーシップに関する理論、企業家の逸脱者理論、そして、本論文におけるイデオロギーとアイデンティティの捉え方を論じている。本論文は、主観的キャリアの重要性を主張したM.L. サビカスの議論に基づき、当事者の語りの中で示される役割移行の過程やアイデンティティの構築に注目する。さらに、研究協力者たちの一連の役割移行を伴うアイデンティティの変遷を、役割の新規性や役割対立、中心性や複雑性といった概念を援用しながらダイナミックかつ論理的に記述すること、そして、協力者の語りに影響を与えうる社会的文化的イデオロギーも分析の射程に含めることを主張している。第4章で研究目的とリサーチクエスション、第5章で調査方法を説明した後、第6章では調査協力者4名の語りに基づくストーリーが提示されている。日本語教師から日本語学校経営者になるというキャリア移行の過程やその捉え方は協力者によって様々であるが、これらの多様性について、経営者自身の役割意識や学校設立に関わる経緯、日本語教師以外の職業経験や家族との関係といった側面から説明されている。第7章・第8章では、日本語学校経営者を取り巻く社会的文化的イデオロギーの様相、そして、「逸脱者」となる日本語学校経営者を考察した。ここでは、日本語学校に係る「教師」「女性」「宗教」といった要素から構築される経済活動に対して敵対的な言説や、経営者を「経済的利益を追求し、組織のために方針をある程度強制し、教職員の生活の確保と組織の永続を担う存在」とみなす言説が日本語学校経営者に対して規範的かつ抑圧的に作用するドミナント・ストーリーとなっており、今回の研究協力者たちはそれぞれの語りの中でこれらの言説との距離感を調整しながら「経営者としての私」のアイデンティティを示していることが明らかになった。最後の第9章では、結論として全体の総括と今後の課題の提示が行われている。

従来の研究では、日本語学校経営者は日本語学校において多大な権限を有し、時には教師の活動を抑圧・阻害する「強者」として描かれることが多かった。これに対し本論文は、経済活動に敵対的な言説が支配的な中で経営に従事しなければならないという矛盾や、あるべき経営者像と自らとの距離感に葛藤を抱えながら、微細かつ複雑なアイデンティティ交渉を通じて自らの合理性を示す者という、新しい日本語学校経営者像を提示している。ナラティブ分析に依拠しつつも、語られた内容への言及が多く「語り方」についての分析が不足していること、アイデンティティやイデオロギーといった論の基礎となる概念の定義にやや曖昧な点が見られること、データから結論に至

るまでの論の展開にやや言葉足らずな点が見られることなど、いくつかの課題も残るが、これらは研究のさらなる発展可能性を示すものであり、本論文の価値を大きく損ねるものではない。

以上のように、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。